透かし絵

広島県呉市　箭田　儀一

夏草の匂いが肺の奥を焦がす
ペダルを漕ぐ足は空回りして
見えない坂道を登ろうとしていた
額の汗が風に冷やされるとき
僕らは世界の輪郭に触れた気がした

分厚い辞書には載っていない
感情の名前を探し求めては
ノートの隅に書き殴った言葉
ポケットの中でくしゃくしゃになり
やがてインクの染みへと変わる
それでも握りしめていたかった
形のない熱だけが真実だった

遠くの川面が夕陽に乱反射する
水しぶきに霞む街の向こうに
終わらない日々があると信じていた
時計の針は静かに狂い始めて
永遠という名の錯覚を生んだ

傷つくことを恐れもしないで
刃物のような言葉を投げ合い
あとでこっそり指先を切った
あの痛みさえも眩しかったのは
僕らが光の只中にいたからだ

いつかこの青さは褪せるだろう
ひび割れた絵の具のように剥がれ
記憶という名の静かな散歩道へ
柔らかく溶け込んでゆくのだろう

だから今はただ、走らせてくれ
未完成な僕らの、痛いほどの鼓動
透かし絵の中に閉じ込めた青春を
破れるまで、空にかざし続けて